
うちのネコは元魔王

ナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウチのネコは元魔王

【Nコード】

N4725V

【作者名】

ナギ

【あらすじ】

勇者に負けちゃった魔王が、転生して猫になっちゃった？
さあ魔王よ、どうする？

勇者は天然とツツコミの二人です。

一話一話が短いです。

魔王 死す（前書き）

これから「ウチのネコは元魔王」を連載していこうと思います。
ナギです。

小説を書くのは初めてなので、間違いだらけかと思いますが、
読んでくだされば嬉しいです。

魔王 死す

「そんな・・・何故だ？」

魔王は必死だった。すでに魔力は底を尽き、これまで、幾度も勇者を排除した魔剣は碎け散っていた。

「魔王よ？　これで終わりだ？」

その手に握られた聖剣に膨大な量の魔力が集う。

「覚えて置け、俺は戻ってくる。」

そう言い放った魔王の心は憎しみと怒り、そして大きな決意で埋めつくされていた。

「次に戦う時、絶対にお前を殺す。」

嘲笑うように勇者が言う。

勝利を目前としたゆえの余裕だろう。

その油断が身を滅ぼす、と言いたいが今は俺の負けのようだ。

「もう戦う時など無かるう。　魔王よ。」

冷酷に事実を告げる勇者。薄暗いこの部屋の温度がいくらか下がった気がする。

うわぁ、俺、死にそう？

そして、魔力が放たれた。

魔王は死んだ。

これが復讐の始まり

魔王 噛まれる

「うう・・・あれ、ここは・・・」

魔王は目覚めた。

「落ち着こう、そうだ、落ち着こう。」

まずは周りを確認・・・

「何故魔物に囲まれているんだ～～？」

魔王の周りには、もともといた魔物がごろごろと転がっていた。それと幼稚なデザインのオモチャが沢山。

「こいつらは？・・・ 痛っ？」

魔王の尻尾に痛みが走った。

「俺の尻尾に噛み付くんじゃね～～？」

えっ、尻尾？」

魔王のお尻には、立派なふさふさとした尻尾が付いていた。

「ええ～～？ って痛たたたっ？」

魔王の尻尾をさっきと同じ魔物がパンチしていた。

「痛いからやめろよ？」

殺すぞ？

「あれ～これ、君の尻尾？」

のんびりゆったりした声で魔物が言う。
っていうか

「・・・お前ら、喋れんの？」

こんなちっちゃいくて弱そうな魔物が話せるとは思わなかった。
「もちろんさ？」

さっきと違う魔物が自信あり気に言った。

「僕は強くて賢い猫族なんだから、ニャン語が喋れて当然だろう

「？」

「猫族だと？」

そんな魔物は聞いた事が無い。

「君、自分が何族かも知らないの？」

のんびりした奴が言う。

こいつウザいな。

「知らないなら僕が教えてあげよう？　この世界には人間族、犬族、鳥族、そして我らが猫族がいるのさ？」

このペットショップにいないから、知らないだけで他にもいます。

「ちよつと待った。その4種族以外に生物はいないのか？　スライムとかドラゴンは？」

「何それ？　そんなのいないよ」

どういうことだ？　いや、そうかもしや・・・

「ここはなんという星だ？」

「星？　ああ人間族がいうには地球という星だそうぞ？」

地球

そうか、　そういう事か

俺はあの時、最後の力で混沌呪文カオスを唱えたんだ

カオスは、何が起こるか分からない呪文

俺は転生したのか

やったぞお

これであの憎き勇者を殺すチャンスが、

手に入った

悪い事をしまくって死ねば魔界に逝ける

「どうしたの？」

「いや、なんでも無い。」

勇者め？ 待っている？

にゃんじ 誕生

「そついやお前ら名前は？」

のんびりした奴、暑苦しい奴、じゃ面倒だ。

「名前？無いよ」僕ら、猫族は人間族に生かされてるから、人間族に名前を貰うんだ」

人間族に生かされている？嫌な予感がする。

「人間族は強いのか？」

「もちろん、僕らの4倍はデカイからね」

そんなに弱い種族になってしまったのか。

1つ、疑問が浮かんだ。

「じゃあ何故、猫族は殺されないんだ？」

そんなことも分らないの？という目で見られた。かなりムカつく。本来の力があれば、こいつは息をしていないだろう。

「そりゃ僕らが愛されているからだよ」

愛されている？それは何だ？ と聞こえたと思った

が、これ以上バカにされたくないので押し留めた。

ふう 地球とやらは面倒くさ「ころころころ」「ニヤツ??

「ミヤアンニヤツムミヤツムウウ」 はっ？ 今俺は

何を？

手元（足元？）にはピンクのボール。

そんな事を考えていると上から声が・・・

『あの子かわいい？ お父さんあの子飼おうよ？』

むっ 何だ？

『どの子かい？』

むっむっ 何か嫌な予感が

『この子？』

むっむっむっ その指が俺を指しているようにみえるのは気のせいかな？

『うーん、この猫は長毛種だし、真っ白だぞ。ハナが欲しいって言ったのは、黒いすらつとした猫だったじゃないか。』

そうだ、もっと言ってみよう？

『でもほら、この子だって一緒に暮らしたいようって鳴いてるじゃない。』

違う？そんなこと言っていない？

『確かに必死に鳴いているなあ。まあハナがいいならこの猫にしよう』

そんな・・・

『今日から、よろしくね。』

・・・

『名前は決めてあるのかい？』

・・・

『うん この子はね にゃんじ』

元気のいい声で言い放った。

「・・・・・・・・・・ ミムニャアヌムミュア〜」

にゃんじ お買い上げ

『この子はね、にゃんじ』

「・・・ミムニャアヌムミュア〜」

「良かったじゃないか？ にゃんじ？」

「俺はにゃんじじゃない？」

全身の毛が逆立っているのが分かる。

「いや〜人間族に名前を貰うなんて良かったじゃん〜」

話に通じていない。

「人間族に何かして欲しい時は、可愛い声で ムミャッ って
鳴けばいいんだぞ？」

「そんな声出せるか？」

「あれ〜さつき出てたよ〜」

ここは、無視。

『すいませーん』

ヤバイ

『はい、何か御用でしょうか？』

『この猫を買いたいんだが。』

ムミャッ？

『ああ、有難うございます。ではこちらで飼い方の説明などをさせていただきますのでこちらへどうぞ。』

『ほら、いくよ　ハナ』

『ハーイ？　にゃんじは？』

『この猫も連れてきていいかな？』

『はい、どうぞ。』

『やったー？』

そうして俺は抱き上げられ、奥の部屋へと連れ去られた。

「何故だ？」（メモミヤムミニャー？）

こんなわけのわからん所に転生してしまうとは、俺はかなりの不幸だな。

だが、今　分かったことがある。

この猫族とかいう種族は、思ったより、　賢い。

にゃんじ 握られる？

この猫族とかいう種族は、思ったより、賢い。

だってこの猫族は、人間族の言葉が分かるし、何より殺されない事情？があるらしい。

これなら簡単に操れるだろう。

くそっ、もう少し大きくて力があつて人間族の言葉が分かれば完璧だったのに？

まあ、いい。

絶対に復讐をし「むっ」(ミヤッ)

また尻尾に痛みが走った。

「コラッ、ハナ？ 何をやっているんだ？」

ハナは俺の尻尾を握っていた。

「あっ、ゴメンなさい。猫も痛いと思うんだね。」

「当たり前だ？」(ムミヤルムツ)

「当たり前だろう？」

少なくとも、このジジイはマトモか。

だが、このハナとやらには気を付けたほうが良さそうだ。

飼い方の説明が終わったようだ。

「有難うございました。もう痛くはしないようにね。」

「またやられたら・・・ひっかいてやる？」(ウーヌムミヤア)

何故か、殺してやる？にはならなかった。

「ハイ？」

『じゃあいこうか。』

『うん？』

こうして俺は桃宮家の一員になったんだ。

にゃんじ 魔力はライター並み？

『ほら、ここがお家だよ。』

ウキウキとした声だ。

何か微笑ましい。

『にゃんじも喜んでるみたい？尻尾をブンブン振ってるよ。』

「何？」（みゃあ？）

俺の尻尾は千切れそうな程、降られていた。

「何で振ってるんだー？」（ふゅやむみゃー？）

『母さんも喜ぶかな？』

未だ浮かれている

『喜ぶだろうな』

親まで浮かれている。

「この家は大丈夫のか？」（ふみゅんにゃ？）
不安だ。

??

何て狭いんだ？ドラゴン一匹も入れん？

かなりの驚きだった。

俺の呪文一つで・・・30は潰せるだろうな。

んっ？呪文？

「呪文っ？」（もんっ？）

また尻尾が振られている。

今の俺は呪文を唱えられるのか？

試してみよう

・・・ここでできそうなのがねえ〜。
俺は攻撃魔術しか出来ないし魔力調整が苦手だ。
何をやっても威力がデカ過ぎる。

いやっ、今の俺はこんなに小さい。
威力も小さくなってんじゃね。
やってみよ
先ずは火

「フレイン？」（ムルル）

ポッ

・・・えっ

魔力少なっ？

今の雑草1、2本しか燃やせてねーよ？
どうしょ？

・・・修行つきや無いか。
ひたすら敵を倒し経験を積み魔力をあげる。
めんどっ
待てよ

敵って、いんのか？

『父さん、にゃんじ』

悪い虫さん倒してくれるかな?』

これだっ?

『きつと倒してくれるよ』

いい事言った? ナイスだ?

虫さんってのはよくわからんが悪いってことは殺っていいだろう。

ターゲットは決まった?

「よっしゃ?」(むるっ)

ちっちゃい庭を抜けた様だ。

桃宮家は結構金持ちで家も普通にデカイです。

『入ろっか』

『うんっ』

「おうつ」「(にゃん)

さあ、敵は何処だ?

にゃんじ 家・・・ではなく小屋をもつ

『ただいま』

『おかえり、気に入った猫はいた？』

この親も浮かれているようだ。

（みゃあ）

と鳴いてみる。

『まあ？可愛い？』

可愛いなんて言われた事無かった。

自然と尻尾が揺れる。

『でしょ？』

なんでお前が照れる。

『ええ、お家にご案内しましょ。』

期待が膨れる。

『ここがあなたのお家よ。』

??

何だ、この小屋は？ここが俺の家？

「ふざけんなー??」（むりやにゆみゃあー??）

怒りを込めて叫ぶ。

『喜んでるね〜。』

はっ？

『そうね。』

はっ？

『何か怒ってないか？』

同じ感情を持つものは、お前だけか。

『次はトイレを見せに行きましょう』

無視かよ、同情する。

それよりも・・・トイレ か。

トイレ・・・はまともだよな、きっと
そうだ。

ああそうだ、きっと

『ここだよ〜にゃんじ。』

周りがあるのは、・・・・・・砂地
まさか？

この砂地がトイレだというのか？

そつ、そん な

俺はまともにも用も足せないというのか？

『良かったね〜にゃんじ。』

・・・・・・何が？

にゃんじ アリキラーになる

ふう、やっと終わった。

俺はずっと、ここは誰の部屋、あそこはお風呂、そうそうここはお庭ね、
と紹介という名の拷問にかけられ、
へとへとになっていた。

今は落ち着いて、小さな小さな小屋で寝ている。

時折、悪魔達が話しているのが聴こえる。

また、あいつは無視されている。

ここに来てからもう10は越えている。

ここでは女の方が強い様だ。

俺は例外だと願う。

明日の為にちよつと寝つか。

当然のように毛づくろいをし、大きく伸びをして寝た。

次の日………

「うーん」(むみゃ)

伸びをする。

小屋の壁に足が触れる。

………虚しい。

『おはよっ、にゃんじ』

悲しみに浸っていると、ハナが話しかけて来た。

言つとくがシヤレではないぞ。
ホントに。

「おはよう」(みゃっ)
返事をしてやる。

よしっ、気を取り直して、
今日から修行を始めるとするか。
小屋から出る。

??

早速アリを発見？

戦闘開始だ？

先ずは爪を出し引っかいてみる。
シュッ

アリは華麗に曲がり、爪をかわした。
ならばっ

俺は右足を出す
と見せ掛けて左足を出した。

フュッ
シュッ

パンッ

アリを叩き潰した。テテテッテッテッ
にゃんじはレベルが1上がった

力が2上がった

賢さが2上がった

素早さが2上がった

魔力が3上がった

ドラゴンのクエスト風にいえばこんな感じ？

それはおいといて、アリではあまり足しにならない。

もつと強い敵を探さ

？？

「キキキキキッ？」

バツタを発見？

戦闘だ？

にゃんじ バッタに逃げられ、蜘蛛倒す

バッタとのバトルはもう半時間程続いていた。

くそつ、速くてあたらねえ。

苛立ちがつのつてきた。

それに

「当たらなければどうという事は無い。ハッハッハ」(キキッキキキキキ)

挑発しおって？

さらに苛立つ。

身体の切れがおちてきたのが分かる。

「また会おう？猫よ？」(キキキキキキキキキキ)

「なにっ？」(むっ)

バッタは羽を広げ、飛び立った。

そして、草むらに消えた。

くそつ、魔王が敵に逃げられただと？

一生の不覚。

許すまじ。

「覚えておけ、バッタめ

次は仕留める。」(むによん)

その為にも修行をしなければな。

俺はあの後、アリを潰しまくった。

100を越えたころ、蜘蛛が現れた。

アリよりは手強そうだな。

んっ、何か歩きにくいぞ。

これはっ
蜘蛛の巣か？

これでは逃げられてしまう？

何か無いか？

あっ、あつた？

フレイン？

ボワッ

蜘蛛がまるこげになった。

やった？

魔力が上がっている？

これでバツタを

殺れる？

いい調子だな？

こうやって殺しまくってれば、

死んだ時、地獄の魔界に逝けるだろうし

同時に強くもなれる。

明日も頑張るぞ？

にゃんじ ネズミって旨い

最近は修行に専念している。

おかげで魔力は上がり、今ではフレインでアリを1度に30は燃やせる。

だが、バツタは倒せていない。

あいつはいつもぴょんぴょん飛び跳ねて避けまくり、草むらに消える。

ム力つく奴だ。

そうそう、人間の扱いには慣れてきた。
可愛い声を出す事も躊躇わなくなった。

『にゃんじ〜ど〜ど〜?』

噂をすれば

「ここだよ」(むみゃっ)

『ここにいたの〜?』

猫撫で声で言う。

『もうご飯だよ』

もうそんな時か。

飯を喰いにリビングに向かう。

『にゃんじ連れて来たよ〜』

「にゅあっ」

今の声に意味は無く、可愛さを追求した声だ。

『にゃんじは本当可愛いなあ。』

悪い気はしない。

カリンカリツカリンカンカリツ

このカリカリした食いもんも美味い。

この生活にも慣れて来た。

そろそろ死んで、魔界に逝ってもいいと思うが、

今は悔いが在る。

バツだ。

あいつを倒さねえと死にきれねえ。

その為に俺は生きる。

スタタタッ

??

今何か通った？

音を立てずにそっと近づく。

「しまった？」（チュウ）

パンくずを持ったネズミがいた。

俺の身体は野生の本能で自然と動いていた。

ジャンプしたネズミを尻尾で、はたき落とす。

そして爪を、命のポンプ目掛けて突き出す。

フュン

外した。

だが

爪を避けたばかりのネズミに牙が迫る。

ズッ

仕留めた。

くわえたままりビングに戻る。

『にゃんじ？ネズミを見付けたの！？』

ポトッ

よく見えるように机に置いてやった。

『きやつ』

んっ、何故離れる？

『死んでるようだね。』

そりゃとどめさしたからな。

『にゃんじ　　ハナはネズミが怖いんだよ。だからな、机の上に置くのはやめてくれないか？』

「しょうがない。分かった。」（らやむゆ）

『ありがとう』

にゃんじ

いいさ

ズルッズル

ネズミを小屋へ連れて行く。

コリッ

??

旨いな？

にゃんじ 洗われる

やっぱり旨いな。

俺はまたネズミを食っていた。

コリツカリツギヤリツ

ごちそうさん。

「よしっ 今日も元気に修行だ？」（にゃんみゅあん？）

捕まった。

『母さん？にゃんじ捕まえたよ〜』

『連れてきて〜』

水の音がする。

『はい』

水の音が近づく。

ハナが扉をかちやっとな開ける。

水だっ？

「離せ〜？」（むんにゃ〜お？）

爪が出る。

『父さ〜ん？早く〜？』

扉が開き、敵が増える。

『コラっ にゃんじ？暴れない！』

必死な声で言う。

「コラっ 人間？離せっ！」（ぬゅみゃっ）

こちらも必死に言う。

シャー

俺に水が降りかかる。

「うわゝ？」（むみゃー）

あっという間に身体が水と泡だらけになる。

『はい、終わったよ。』
開放される。

.....

ピュン

凄い速さで小屋に駆け込む。

もう人間は信用しない？

許さないぞ？

絶対に出てやんねえ？

「許さねえんだからなー？」（むー

みゃーん？）

にゃんじ 海苔？

人間なんてもう信用しない？

にゃんじはまだ拗ねていた。

謝罪する人間の声が聞こえ・・・ない。

「謝る気も無いのか？」（しゃみゆにやむみゃ？）

怒りはつのるばかり。

もう許さん。

カチャッ

アレがしまつてある棚の扉が開く音。

俺の足は勝手に動いていた。

テッテッテッ

『にゃんじやつぱり来たね』

『そうだね』

はめられた？

戻ろうと思っても足が動かない。

『にゃんじはほんと、海苔が好きだね。この棚開けるとすぐ来るもん。』

「俺の足よ？　いう事を聞け？」（ふやひゆみゆ？にやりゆみゃ？）
足は動かず、尻尾は降られていた。

『はいつ、どうぞ。』

「むみゃあ？」

嬉しそうな声が出た。

パリッ

旨い？

パリッパリッパリパリッ

やっぱ海苔うめ〜？

さっきまでの怒りは吹き飛び、ご機嫌になっていた。

『洗っちゃってゴメンね。』

「まあいいだろう。許してやる。」（ふにゃん）

『ありがと、にゃんじ。』

時々、こいつらは俺の言葉を理解しているのかと思わせる所がある。

まあ本当のところ、こいつらは都合の良いように聞いている
と分かってはいるんだが。

にゃんじ 海苔？（後書き）

次回からは勇者の話に移りたいと思います。
しばらくにゃんじの出番は無しです。

にゃんじ「そんな〜。」（ふみゃ〜）

2人の勇者 出会う

「殺ったのか？」

「いまだに勇者は実感をもてずにいた。」

「きゅっ 九代目勇者様？」

「何者かが階段を登って来たようだ。」

「んっ！？もしかしてあいつは」

「十代目勇者？」

「はいっ、何をしていたんですか！？」

「何をつて魔王を倒してた。それより何故お前がここに？」

「何故つて、貴方が出てからもう1年以上たっていますよ！？それに魔王を倒してたって・・・えっ、魔王を倒してた！？」

「・・・え〜〜〜？」

「なっ？我は1年も、ぼーーーーっとしてたのか。」

「そっそれなら早く城に戻りましょう？」

「まだ落ち着いていないのか。」

「盛大なパレードですよ？なんたつて魔王が死んだんだから？これで世界も平和にっ・・・てあれ？」

「どうした？」

「変ですよ？おかしいんです？魔王が死んだっていうのに、魔物は

うじゃうじゃいるし、太陽は出て来てません。まだこの世界は闇に包まれています?」

「なっなにっ?」

「そんなはずは無い。」

「あっ分かりました? きっと魔王を倒したばかりだからですよ? だんだん良くなってくるんですよ? きっと?」

「残念ながらそれは無い。だって」

「魔王を倒したのは1年前だ。」

「ああ、1年前ね。倒しにいったのもそれくらいだったもんね、そりゃそうか、うんうん……って? 1年前?」

「そうだ。」

「もう1度訊きます。1年も何してたんですか?」

「魔王を倒したという実感がもてなくてボー……っとしてた。」

「……この1年 必死に鍛えた僕の努力は、
どうなるんだ……?」

「水の泡になるんだ。」

「ぐはあっ、そんな直球に言わなくても」

「昔から直球に投げるのは得意だったんだ。」

「何の話っ!? ってか、かなりの天然!？」

「とにかく城に戻ろう。」
「そっそっですね!？」

この勇者ってヤバイかも

魔王を倒し勇者 強すぎ!?

「ほらっ早くしろ。」

「はいはい。」

僕は1年もボーボーっとしてた勇者と城に向かって歩いてた。

「はいは5回?」

「はいはいはいはい……って何じゃそりゃ!?!」

「魔物は死ぬと何になる?」

「灰」

「チツ、引つかからないか。」

「どこに引つかかる要素が!?!」

「んっ我は引つかかったぞ。」

やっぱヤバイよこの勇者 この先どうn!?!?

「魔物 出たな。」

感心したように言う。

「何に感心してんの?!?!出てるって言ったじゃん!?!」

「お前の話、信じて無かった。」

「誇ったように言わないで?!?!」

「まっ、殺すか。」

そんな軽く殺せる相手じゃ無いと思うんだけどな。

だってこいつ等ドラゴンだよ。

定番でお強いドラゴンだよ。

まっ、僕だって勇者だ。本気出せば10分で終わる!?

「よしっ先行くか。」

灰が風に吹かれ飛んで行った。

つつ強い?

魔王倒したつても信じられるかも。

「えっ」

「魔王倒したつてやつ」

「そそりやもちろん。」

「嘘だな。我はマインドアイを覚えている。嘘は見えている。」

マインドアイ? あれは僧侶専用の呪文のはず、勇者は覚えない。

「ハッターだろ。勇者は覚えないはずだ。」

「ふっ愚かな。お前転職した事無いのか?」

転職って確か元の職業を極めないと出来ないよな。 まままさか

「我は全職業を極めている。」

「何ちゅー廃人だよ! ? チートだろ! ? そりゃ魔王倒せるわ! ? 」

「うるさいな、話を戻せ。」

「あっああ」

「はいは5回？」

「はいはい！？ってそこに戻る！？」

「まあ冗談はさておき」

天然はマジとボケの区別がつかねえな。

「お前だって信じて無かっただろ。」

嘘つけねえとかおかしいだろ。もうヤケだ

「ああそつだよ。信じて無かったよ。ていうか何？信じて無かったらなんなの？」

これで殺すとか言われたら灰になるだろうな。

「別に。何も。」

えっ

「何の為に聞いたの？呪文まで使って！？」

「我は正しい　という事を確かめる為だ。呪文に関しては問題無い。私の魔力は有限では無い。つまり無限だ。」

やっぱおかしいよ

「敵来たぞ。」

珍しく深刻な声だ。

んっちよっと待てよ、ドラゴンの時はもっと軽い調子だったよな。て事はドラゴンより強い魔物？

「どこにいんの？」

「あそこだ。」

えっスライム!?

「あいつなら僕が殺りますよ。」

僕だって勇者何だってところを見してやる。

「大丈夫か?」

不安そうに言われた。

スライムくらい倒せるさ。

「おりゃ〜?」

戦闘開始だ〜?

スライムに倒されし勇者 弱すぎ!?

ドタッ

「……………まあ、予想どおりだな。」

「アイスン」

グアザア

氷の刃がスライムを貫き、灰とした。

「ライファゲイン」

蘇生の光があいつの灰に降り注ぐ。

「んっあれ？」

「我が蘇生してやったんだぞ」

「えっ俺、死んだの？」

「ああ、秒殺だったな。お前が馬鹿みたいに叫んで飛び掛かった瞬間に首が飛んだからな。お前、スライム舐めてただろ。」

「はいい。……………っっていうか僕死んだんだよね。何で今生きてんの？」

「さっきいったら、蘇生したんだよ。」

「そっそそそ蘇生!? 蘇生呪文って伝説じゃ無いの!？」

「使えるのは我だけだろうな。おっ、城が見えたぞ。」

気づけば城は近かった。

「魔王が死んだ事を早く伝えよう。」

「そうだな。」

「止まれっ、この城に入りたいのならば名を申せ。」
城の門番の様だ。懐かしい。

「我は……誰だっけ？」

「「えええー！？」」

「というのは冗談だ。」

「んっ、まさかこのマジカボケが分かりにくい冗談を言う天然
なのに能力はチートなやつは！？」

「9代目勇者だ。」

「「自覚あんのかい！？」」

「そしたらあんたは10代目勇者？」

「ああ」

「魔王はどうしたんだ？」

「我が倒してた。」

「倒してたって何時？」

「1年前。」

「何で帰って来なかった？」

「ぼーーーーっとしててな。」

「……………やっぱあんた凄いよ。でも魔物消えてねえぞ。」

「それは我にも分からん。」

空気が重くなった。

「とりあえずパレードだろうな？」

「君とは気が合いそうだよ。」

「僕もそう思うよ。」

「行こうか。王と話さなくては。」

「はいよっ」

「はいは5回？」

「はいはいはいはい。」

「魔物は倒すとどうなる？」

「灰になる。」

「不正解だ。魔物は倒したら倒しただけ強くなるんだ。」

「別バージョン!？」

スライムに倒されし勇者 土下座で死ぬ！？

はあっやつと王室に着いた。

混乱させない為、民から隠れてここまで来た。

勇者って感じしね。

それよりもこの勇者といるってのが疲れる理由だな。

「我に隠せるものはないぞ。若き勇者よ。」

その手に膨大な魔力が集う。

「申し訳御座いませんでした。」

一瞬で地に頭がつく。

「プライドのラの字も無い奴だな。」

「何故にラ！？そこは、プでしょ！？」

ツッコミも慣れて来たなあ。

ガチャッ

扉が内側から開いた。

「えっ」

「さっきから声が聞こえてたぞ。一体どk！？
者×2！？」

勇

「何故にその表記！？
なの？」

勇者が二人！？

とかじゃダメ

「面白い勇者だな。誰だっけ？」

「いや、あんたが3日前に送り出したんだけど
されて無かった！？」

僕って期待

「期待していなかった。」

「えええー!?!」

「ってちよつと待てよ、僕って今誰と話してる？」

「王様じゃん!?!」

「……………」

「どうした?」

「申し訳御座いませんでした。」

「また一瞬で地に頭がつく。」

「んっ?」

「てつきりこつちの勇者と話してるかと思いですね、何か色々無礼な事をしてしまいました。」

「……………はっはっはっ、面白い。」

「えっ」

「そつちの勇者が誰の息子か知らないだろう?」

「はっはい!?!」

「はいは5回?これは私が教えたんだ。」

「はいはい!?!?もっもしかして!?!」

この展開は・・・・・・・・
勇者のほうを見る。

「・・・・・・・・我は王子だ。」

「申し訳御座いませんでした。」

またまた一瞬で地に頭がつく。

実は今日7回目。

ヤベエ目の前が真っ赤だ。

ステンドグラスから綺麗な光が、僕を照らしている。

もう疲れたよ

眠いよ

パトラッ
s

ドタッ

2人の勇者 地球へ

「全く、土下座で死ぬとはな。」

「面白い勇者だ。」

「ああ。」

「ところで魔王どうした？」

「倒した。」

「そっか。」

「魔物消えてないんだろ。」

「ああ。」

「何でだろ？」

「魔王生きてんじゃないね。」

「かもな。」

「あの勇者どうすんだ？灰、飛んでってるぞ。」

「あつ。」

「フレイン」

ゾウサイズの火球が飛ぶ。
ドガン

「ミスった。」

「そっか。」

「……」
「ツッコミはいるな。」

「ライフアゲイン」
灰が集まり勇者になる。

「んっ、って僕どうしたんだ？」

「死んだ。」

「何で!？」

「土下座で。」

「えええーマジでえええー!？」

「マジで。」

「此処の床何でできてんの？」

「オツリハルコーんだ。」

「何その発音！？、オリハルコンでしょ！？ってかオリハルコン！？」

「……………」

「どれだよ！？」

「よしっ決めたぞ、私の息子と共に魔王倒しに行け。」

「どういう事ですか？」

「なんでやねん。」

「魔王は生きてる。お前ら相性良さそうだし行って来い。」

「分かった。」

「分かつちゃうの！？ってか魔王生きてんの！？」

「行くぞ。」

「ナニヲ？」

「……父上どこにいれば？」

「わかんなかったんかい!？」

「地球かな。」

「かな　　つて何々!？」

「じゃ、行って来るわ。ソニックワープ。」

チャリン

「チャリンって何さ!？」

勇者に連れられ僕は無理矢理地球へ転移した。

「何でこうなるの――！？」

スライムに倒されし勇者 必殺空中土下座

ふゆ~~~~~

2人の勇者は道を抜け、地球の上空1万メートルの位置に飛び出した。

「ダメじゃん!？」

「大丈夫だ。」

ウイングン?」

光輝く羽があいつの背中にはえる。

「何それ?」

「知らんのか?有名な呪文だぞ。羽がはえるってやつ。」

「覚えてんのか?」

「今、つかっただろ。」

ふうう良かった。これなら死ななくて良さそうだ。安心安心。

「僕にもかけてくれ。」

「ヤダ。」

「良かった。これで死な?!?」

ってヤダ!?何で!?!」

こいつ、乗りツッコミ好きだよな。

「ウイングンよりライフアゲインの方が魔力、少なくともすむから。」

「あんたの魔力って無限じゃないのかよ!?!」

「ああ、あれ冗談。」

・ ・ ・ ・ ・
ツッコミは地に頭から突き刺さっていた。
「やっぱ面白い。」

スライムに倒されし勇者 必殺ブラッドシャワー

我はその面白い光景をしばらく眺めた。

「ライフアゲイン」

ツッコミが復活する。

「早くしろ、行くぞ。」

「早ッ、ってというか何処行くの？」

「魔王の所」

「分かんのか？」

「………」カチャッ

四角い何かを取り出しついている突起を押している。
ブルルルルルッブルルルッカッ

「父上、魔王はどこにいるのですか？」
なんじゃありや

「えっサイタマ？分かりました。はい、えっ、はいはいはいはい、
ハイクですか？、なっそうきましたか。さすが父上？
んっそうだ。後で地に刺さったツッコミの写真送ります。では。」

「それ何？」

「秘密だ。」

めっちゃ気になる。

「教えてよ。」

「駄目だ。」

「お願いしますよ。」

「フレインが欲しいのか？」

「死にたいのか？」

「申し訳御座いませんでした。」

「宜しい。」

サイタマに行くぞ。」

「はい。」

『誰かいるのか？』

「ステルスン」

勇者が消える。

「えっ！？」

『誰だ？』

「えっあの僕は！？」

『此処は関係者以外立ち入り禁止区域だぞ。何をしていたんだ？』

「いや、別に怪しい者じゃ！？」

『まあいい、ついて来てもらおうか。』

「これヤバくね！？」

「マントの下、鎧だし剣持ってるし！？」

「ここは賭けに出よう。」

1人位なら、

『おいどうしたんだ？んっ誰だこいつ？』

『此処に居たんだよ。』

『怪しいな。っていうかマント！？俺始めて見たよ。』

『俺もだ。』

マントを見たこと無い？いったいどんな世界なんだ！？

『こっこいつ剣持つてるぞ？』

しまった。マントの端からとび出たようだ。

やっぱ戦うしか無い。僕だって勇者だ。

僕は剣を鞘にいれたまま首筋を叩いた。

ボキッ

「えっ！？」

首の骨が見えるのはなぜ！？

『なっ！？うわあああああああああああああ！？』

ダアンッ

ダウン

ドゥアン

何の音だ？

力が入らない。

←

身体を見る。

←

スライムに倒されし勇者 スライムになる

『誰かいるのか?』

「ステルスン」

消える。

「えっ!?!」

ツツコミが戸惑っている。

『誰だ?』

「えっあの僕は!?!」

『此処は関係者以外立ち入り禁止区域だぞ。何をしていたんだ?』

「いや、別に怪しい者じゃ!?!」

『まあいい、ついて来てもらおうか。』

思った通りの展開だな。

見てて面白い。

まあ1人位なら、殺れるだろ。

『おい、どうしたんだ? んっ誰だこいつ?』

『此処に居たんだよ。』

『怪しいな。っていうかマント!?!俺始めて見たよ。』

マント見たことないとかかなり貧相な暮らしたったんだな。可哀想に。

『俺もだ。』

お前もか。ここは貧しい者だらけの様だな。

『こっこいつ剣持ってるぞ?』

マントの端からとび出てたとか馬鹿だな。

おっ動いた。

鞆のままか。つまんねえな。

ボキッ

はっ!?

あいつ首折りやがった。

見かけによらず非情な奴だな。

『なっ!?!うわあああああああああああ!?!』

ダアンッ ダウアン ドウアン

あれは!?

魔力で何かを打ち出したのか?

いや、違う。

あの機には魔力が無い。

どうやって撃ち出したんだ!?

うーん、分からん。

この世界はやっぱ変なもんばかりだな。

まあこのケエタイとやらは便利だが。

また今度調べてみるか。

バタッ

あつツツコミ死んでる。

仕方ねえな。敵打ちしてやっか。

「フレイン」

ドォーン

敵は1人残らず焼滅した。

「よしっ。」

その時、我は満面の笑みだっただろう。

「ライフアゲイン」

何度目だろ。こいつ蘇生すんの。

死に過ぎだよな。

むくつとツツコミが起き上がる。

「はあ。」

ツツコミが悲しそうにため息をつく。

「悲しそうにため息をつかれても困るのだが。」

「僕、勇者だつて自信が無くなってきたよ。」

「ああ、そうだな。弱いし、気はきかないし、馬鹿だし。」

「ああ、そうだよ。僕は弱いし、気はきかないし、馬鹿だ。もう勇者辞めようかな。」

それなら・・・

「じゃあ、辞める。」

ツツコミが顔をあげる。

「えっ。」

驚いているようだ。

「そんなくよくよした勇者何て要らん。辞めちまえ。」

「いやっ本気で言った訳じゃ。」

焦ったようにツツコミが言う。

「お前が何を言おうと関係ない。今日からお前は・・・そうだ？笑わせ師だ。」

「はっ!？」

「おお神よこいつを笑わせ師にしろ。」

「神に命令口調!？っていうか、転職って元の職業極めないと駄目だろ。」

問題無い。何故なら

「俺の能力はチート並だ。出来ない事など無い。疑うなら自分の身分証明書を見ってみろ。」

やな予感。

パカッ

見ってみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・スライムになっとるううううううう!
う!？」

「あれ、すまん。ミスった。」

これはマジでミスった。

「直してくれよ。」

「やだ。」

「はっ!？」

「職業スライムっておもしろいよ。変わるのも表記と覚える技だけだから。」

「えっ ええええええええええええええええ!？」

そうして僕はスライムになった。

2人の勇者 やつとサイタマに

「そうだ、さっき思ってたんだけどさ。ここの奴らって弱いよな。」

「僕はそいつ等に殺られたんですけど。」

「まあスライムだからな。だが、確かに弱かった。スライムでも首折れる位な。」

「あつ確かにそうだ。」

「あいつら死んじゃったのかな。」

「あいつらは蘇生してから、記憶消して寝かしといた。」
僕の心を読んだように言った。

「っていうか、読んでもるのか。」

「記憶消すとかやっぱチートだな。」

「まあな。」

「自覚あるのか？」

「あれっ!？」

「どうした？」

「技が1つ増えてる!？さっきの戦闘で覚えたのかな？」

「ワクワク

んっ!？」

「………スラ・ストライクって何だよ!？」

「ああ、それはスライム専用の技だな。」

「やっぱり。名前から想像ついてたよ。」

「でっ、どんな技？」

「素早い動きで相手に突進する技だ。」

「それってつまり……」

「一言でいえば、タックルだな。」

「それは技といえるのか！？」

「まあ覚えて置いて損は無い。」

「そうなんだけどさー。」

「スライム専用技って他に何があるんだ？」

「技はスラ・ストライクだけだ。」

「はいっ！？」

「んっ技は？」

「技では無いが、スライムには合体がある。」

「合体？」

「そうだ。同じスライムと合体し強いスライムになれる。」
「やりたくねえ。」

「合体した時、動かすのは強い方のスライムだ。強い方っていつてもレベルでは無く種族の強さだけだな。」

「そっついや僕ってスライムの何て種族なの？」

「ツツコミスライムだ。」

「何じゃそりゃ!?!」

「ツツコミスライムより弱いスライムはただのスライムぐらいだろ
うな。」

「えっ、じゃあ何、純スライム以外と合体したら相手を強くするだ
けってこと?」

「そうだな。」

「ああ、もうツツコミスライムやだなあ。」

「つべこべいうな。」

ソニックワープ?」

「えっ!?!」

ピョン

「ピョンって何だよ!?!」

僕と勇者は変な効果音と共にサイタマに、転移した。

にゃんじ バッタにフレイン？

「みゃあ？」

俺様は最近猫じゃらしと格闘？していた。

これでも強くなれるようだ。

なにより楽しいし。

『ほれっ？』

そう言つて、ハナが猫じゃらしを放る

「ぬにやつ？」

猫じゃらしが少しずつ遠ざかっていく。

狙いを定める。

お尻が揺れていた。

「にやつ？」

なにっ読まれた？

猫じゃらしは絶妙なタイミングで俺の爪と牙から逃れている。

「ふにやつ？」

猫じゃらしが飛び、爪を避ける。

「だが？」（むるっ？）

尻尾で猫じゃらしを薙ぎ払う。

ポロッ

ハナの手から猫じゃらしが落ちる。

「よっしゃー？」（みゃんにょん？）

『凄いね、にゃんじ？動きが速くなってるよ？』

確かに強くなっている。

だが、この程度では勇者に勝てない。

フレインは大きくなってきたが、まだ自分サイズ（猫サイズ）だ。
あの勇者の魔力ならライオンサイズで放てるだろう。

本気だと地球サイズを放てます。

「当ててみるよ。ハッハッハッ」(キキキキキキッ)
窓の外で奴が叫んでいる。

「ぬゆむ？」

バツタか？今日こそ？急いで外に出る。

「死ねっ？」(にゆなっ？)

噛み付く？

外れる。

切り裂く？

避けられる。

こうなったら

「フレイン？」

「当たるかよっ？」(キキキキキキッ？)

トテッ

バツタが躓いて転ぶ。

「えっ！？」(キッキキッ！？)

ジュアアアアアン

火球がいつものように外れて

いない？

当たった？

「なっ なんだ

と」(キッキキキッ・・・キッ)

たっ倒した！？

「殺られるかよ。」（キキキッ）
瀕死だが、生きている。

「耐えたのか？」（にやむみゃ？）
あれを耐えたのか。

「今日は勘弁してやる。」（キキキッキキッ）
ピヨーン
逃げられた。

おっ新しい呪文か？

こっこれは？

ライフブレイク？
即死呪文だ。

通常、ミスが殆どだが魔王という職業だと当たる確率が90%になる。

正に魔王専用のチート呪文。

これで勇者を

駄目だ。

あの勇者は確かスキル デスガードを持っていた。

スキル デスガードは即死無効化の効果を持つ常備スキルだ。
この呪文は効かない。

チツ だが覚えて置いて損は無いだろ。

バッタとはきつちりケリをつけたいから使わないでおこう。

もう少し鍛えたら勇者倒しに行こうかな。

対決の時は近かった。

にゃんじ 魔王辞める！？

キヨッ

変な音と共に2人の勇者はサイタマに現れた。

「ここら辺に魔王がいるはずだ。」

目をつむり集中している。

「ここら辺って！？」

一応ツツコミを入れておく。

「あそこだ。」

指をむける。

「見つけんの早っ！？っていつか目の前！？」

「桃宮 か。ちっちゃい家だな。」

「本当にここ？」

「絶対にここだ。」

「じゃあどうする？突入でもするか？」

「ああ ステルスン」

2人の勇者が消える。

「行くぞ。」

「おうっ。」

門をそつと乗り越え庭に入る。

「何か動いた？」

ツツコミが見ている方を見る。

「何だ、猫じゃないか。」

「ネコ？」

「知らんのか、この世界の動物だ。この世界は人間という種族がたくさんいる。猫はそいつらと共存しているんだ。」

「ふーん、可愛いな。」

ネコとやらを抱いてみる。

「んっそんな！？何！？」

勇者が何かつぶやいている。

「どうした？」

「ツッコミスライム？そいつから離れる？」

「えっ！？ グッ！？」

ツッコミスライムが死んだ。

「ライフブレイクか。魔王だな。」

「気づくのが遅いな。」（みゃあによむ）

「よく化けたもんだな。」

「あれっ言葉分かんのか？」（むるみゆ）

「ああ、この世界の奴らには聞こえないだろうが、我らには聞こえる。」

「あっそうそう、言っとくけど俺、化けてないから。」（にゃん）

「どういうことだ？」

「俺っ転生したんだ。」（むんみゃ）

「転生！？じゃあ死んだのか？」

心底驚いたようだ。

「お前に殺られたんだろうが。」（にゃむみゃ）

「じゃあ何で魔物は消えない？」

そんな事？

「魔物？もしかして俺が黒幕だと思ってたの？」（むるっぬゆむにゃ）

「違うのか？魔王だろ。」

「魔王より強い奴。分かるだろ？」（ぬよみゆ）

もしかして

「魔神？」

「大正解？景品は

死だ？」（むっ

にゃーー？）

「フレイン？」

俺は全力で放った。

「フレイン？」

勇者の火球は俺の火球の何倍もでかった。

「はっ！？」（にゃあ！？）

ドウアオオオン

「終りだ。」

剣が迫る。

実力が違い過ぎる？
これじゃ

『にゃんじ？』

はっハナ！？

『なにやってるの？あれっあなた誰？』
ステルスンは既に解いていた。
「あっいや我はあの！？」

『にゃんじを虐めないでっ』

「ハナ」(みゆ)

「ふっ、愛されたものだな。」

「にゃんじ。」

「その呼び名はやめろ。」(によむ)
勇者は剣を収めた。

「何故だ？」(もん)

「今、お前を倒す必要は無くなった。ここに魔王はいなかった。いたのはただの飼い猫にゃんじとその主人だけだった。そうじゃないか？」

何というカッコつけ勇者？

でも

「ありがとう。」(むるにゃ)
俺は始めてこの言葉を使った。

「変わったな。」

「まあな。」（にゅなっ）

「じゃあ行くとするかな、お前の主人は我のことを覚えて無いだろう。直ぐに起きるから心配するな。」

気付けばハナが寝転がっていた。やっぱりおかしい強さだ。ていうか

「待てよ。魔神 倒しにいくんだろ。」（むよむによ）

「ああ、そうだが?」

「俺も行く。」（ぬゅむぬ）

「何で?」

「場所しらんだろ。」（にゅん）
勇者が止まる。

「………確かに。 来てくれるか?」

「おうっ、それと その奴は、ほっといていい
のか?」（みゅ にやるむ?）

「おっと、忘れてた。ライフアゲイン」
ツッコミスライムが復活する。

「よしっ行くか?」

「えっ!?何!?僕、誰に殺られたの?」

「俺だ。」（むるる）

「早く？　行くぞ？」

勇者が歩き出す。

「なにっ、誰か説明してー！？」

ここで優しい俺が説明してやった。

「要するに魔神倒しにいくんだよ。」（にゅなっ）

「魔王じゃねえの？」

「魔神倒せば魔物いなくなる。この魔王が教えてくれた。道案内して貰う。これで分かったか？」

「分かったけど・・・魔神倒せるの？」

「もちろん？」（にやるむみゃあ）

「当然？」

この2人ならいけそうなきがする。とこの時ツッコミスライムは思ったそうだ。

「じゃあ行こう？先ずは魔界にワープ？」

「わっ我がやるのか？」

何でわかんねんだ。

「俺は攻撃呪文しか覚えられねえんだよ。」
魔王の欠点だ。

「分かった。ソニックワープ？」

トトトトッ

「何の音なんだー！？」

そうして俺らはツッコミと共に転移した。

魔王を倒せし勇者 魔神を！？

ボンッ

チャッ

キュン

ポシッ

俺達はいろいろ転移して、魔神の部屋の前に辿り着いた。

「ここだ。」（むるる）

「本当に倒せるかなあ。」

ツツコミスライムは不安そうだ。まあスライムだし仕方ないか。

「大丈夫だ。我らは最強チーム。絶対に勝つ？」

最強チームか。こうして共に戦うのは始めてだというのに。と同時に最後まであるのか。

この戦い、勝てばもうただの猫としてハナとゆっくり暮らせる。ハナ待っている？

ガチャ

「えっ！？」

「はっ！？」（むんるっ！？）

「んっ！？」

「さっきから全部聞こえてたぞ。へえー 勇者・ツツコミスライム・

猫　　んっお前、魔王か。まっどうでもいい。思い上がりもいいところだということを教えてやろう。」

部屋から魔神が出て来た。

そして・・・

「スパークン？」

電撃が空中を走る。

俺は避け、爪で引つ掻く。

「貧弱な」

ドウオーン

「くっ。」（にゅっ）

何が起こったのか分からない。

かなり体力を奪われた。

やっぱり無理なのか？

魔神が近づいてくる。

死ぬのか？

「ウオオオオオオ？」

ツツコミスライムがこっちに走って来る。

「スラ・ストライク？」

ドン

「うわああああ！？」

呆気なく弾き飛ばされる。

「フレイン？」

勇者が火球を放つ。

魔神は手を振る。

火球が消えた。

「これがお前らの最強なのか。ふっハッハッハッ　お前ら3人が一緒になってかかってきても負けることなどないだろうな。」

我らの力はこんなものだったのか。
力を合わせても勝てないのか？

んっ？

合わせて！？

そうだ。

この勝負まだ終わっていない。
我の力はチートなんだ。

いける。

「おお神よ

こいつをスライムにしろおおおお？」

「ハッハッハッ気でも狂ったか？表示を変えても能力は変わらない。
無意味なことを。」

これが無意味？

馬鹿め。

「ツツコミスライム？今だ？」

ツッコミスライム 魔神と共に……

「ツッコミスライム？今だ？」

勇者が何か言ってる。

「えっ！？何が今なの！？」

ヤベエあいつ気付いてねえ。

合体っていったら魔神にバレちまう。

俺がやってやんねえと。

にゃんじは勇者の考えが分かっていた。

確かスライムの合体は接触すれば、始まるはず。

接触！？

いいのがあるじゃねえか。

「ツッコミスライム？スラ・ストライクだ？」

これなら接触するはず。

「いや、にゃんじさん、あれは通用しなかった。意味ないよ。」

クソッ面倒な奴だ。

どうすればいい！？

にゃんじ、あいつは気付いてるみたいだな。

スラ・ストライクか。これでっ

「いや、にゃんじあれば通用しなかった。意味ないよ。」

変なところで頭使いやがって

そうだっ？

「ツツコミスライム？今、我が攻撃力アップの呪文をかけた。今のお前ならいける。スラ・ストライクだ。」

これなら

「分かった。僕だつてやるときゃやるんだ。ウオオオオオオオオオオオオオオ」

よしっ。

よしっ殺つてやる？

僕だつて勇者だったんだ。

「スライム舐めんなよおお？」

スラ・ストライクウウウウ？」

トンッ

魔神に当たった？

な なんと スライムたちが・・・。

合体して ゴッドスライム になってしまった！

「「よっしゃー？」「（みゃあ？）」

「はっ！？」

「何っ！？何っ！？どうなってんの？」

未だにツツコミスライムは何が起こったか分からないらしい。

「前、話しただろう。スライム系は合体出来ると。」

「えっ、じゃあ僕、魔神と合体したの！？」

「そうだ。魔神はただのスライムにして置いた。だから合体した時、身体的所有権はツツコミスライムのお前が持つことになったんだ。つまり今、魔神はお前の中に封印されている。」

「全く嬉しく無いんですけど。っで この後、どうすれば？」

「「死ね？」「（むみゃゆ？）」

「はっ！？」

「お前が死ねば魔神も死ぬ。大丈夫だ。多分、蘇生してやる。」

「多分はやめて！？」

「じゃあ自殺お願いしまーす。」（むるるるみゃああ）

死ぬのに慣れてきたって怖いな。
よしっ死んでやろう。

何で死のうかなー。

技の欄を見てみる。

おっ、これいいじゃん。

「捨て身？捨て身？捨て身？」

捨て身は防御能力を下げて攻撃能力か魔法攻撃能力を上げる技。

「これでトドメだ。魔神？」

必殺 超絶土下座？」

ダウオアアアン

床に亀裂が走る。

頭が割れてる

ツツコミスライムとスライムは死んだ。

「ふうう、終わった。」（みゆむ、にやむみゃ）

「終わったのか。」

我はもうボーーーーーっとしなかった。
何故なら待たせている仲間がいたから。

「ライフアゲイン」

灰が集まりツツコミスライムになる。

この光景をなんと見たことやら。

「良かった。蘇生してくれないかと不安だったよ。」

「もう全て終わった。全ては過ぎ去った。城へもどるぞ？」

それとお、にゃんじ、ありがとな。もう魔王も魔神もいない。お前のおかげだ。」

「魔神に関してはあまり役に立てなかったがな。まあもう関係無い。俺はにゃんじ、ただの猫のにゃんじ。ハナの元に戻るよ。」

「・・・もう会う時など無かるう。友よ。ソニックワープ？」

にゃあああ

「その音はねえだろおおお！？」

こうして魔王の復讐劇は幕を閉じた。

ツッコミスライム

魔神と共に……………（後書き）

次が最終話です。

にゃんじ 幸せをつかむ

ピーポーピーポー

「本当変な音だな。」（みゃむ）

テツテツテツ

走って庭を抜ける。

宿敵のバツタを見た気がするが今はそれどころじゃない。

あのバツタは絶対に倒す。

勇者を倒す目的がなくなったから、今度からあいつに専念しよう。

じゃっ、あいつは新しい宿敵だ。

ちよつと楽しみ。

待てよ、ヤベエな。

よく考えりゃ魔神倒しに行ってから1日位たってるよ。

心配かけちゃっただろうなあ。

足が速くなっていく。

こついう気遣いもここに來て学んだ。

あつ、しょんぼりとしたハナが見えた。庭のイスに座ってうなだれている。

「みゃあ？」

勝手に声が出た。

『にゃんじ？』

ハナの驚きと喜びに満ちた声。

「みいにやあ？」

鳴きながら机に飛び乗る。

「にゃんじ？」

ハナに抱き上げられる。

「みいいいにや」

わざと可愛い声を出す必要は無かった。心から本音は言葉になっ
ていなかった。

「母さん、父さん、にゃんじ帰ってきたよお？」

ドタツバタツガツシャン

皿が割れる音や椅子が倒れた音。

騒々しい音を立てながら、母さんと父さんが駆けつける。

「『にゃんじ？』」

ホツとしたようだ。

「どこに行ってたの？」

「何をしてたんだい？」

「みゃあ」

この人たちと、話が出来たらいいのになあ。

「お母さんもお父さんも、そんなに一辺に言ったら、にゃんじ困っ
てるよ？」

いや、もう十分かもな。

だってここは俺の家。
俺の居場所。

そしてなにより、ここにいるみんなは

俺の大切な家族だから。

にゃんじ 幸せをつかむ（後書き）

最後まで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4725v/>

ウチのネコは元魔王

2011年11月7日13時24分発行